



## 序 文

京都医療センターのアンニュアルレポート令和元年度版をお届けいたします。

この年、日本では平成の明仁（あきひと）天皇陛下が4月30日に退位され、皇太子徳仁（なるひと）親王殿下が5月1日、第126代天皇に即位されました。新元号「令和」は、元号では初めて、日本の古典「万葉集」から引用されました。そしてリチウムイオン電池を開発した吉野彰先生がノーベル化学賞を受賞されました。スポーツ界では、アジア初開催のラグビー・ワールドカップ日本大会で日本代表が初の8強入りを果たし、プロゴルファーの渋野日向子選手が全英女子オープンで優勝し、野球のイチロー選手がマリナーズを引退しました。悲しい出来事としては、京都市伏見区で京都アニメーション放火殺人事件が発生し、当院の医師、看護師も救助、救命活動にあたりましたが、多くの方が犠牲となりました。また、沖縄の首里城が焼失しました。海外ではパリのノートルダム大聖堂も焼失しました。スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリさん（16）が国連本部で開かれた「気候行動サミット」で演説し、地球温暖化対策の実行を急ぐよう訴えたことも印象的でした。

令和元年度、京都医療センターでは7月にロボット手術daVinciサージカルシステムを更新して新機種を導入しました。10月15日には高精度放射線治療棟（リニアック棟）が完成し、従来よりも正確に病巣に対して放射線を照射し、かつ周囲の正常臓器への被ばくを低く抑える放射線治療が可能となりました。11月には患者支援センターを新たに開設しました。12月には当センター初となる3テスラ磁気共鳴断層撮影装置（MRI）を導入しました。令和2年2月には（財）日本医療機能評価機構が実施する「病院機能評価：一般病院2（3rdG：Ver2.0）」ならびに「高度専門機能：救急医療・災害時の医療（ver.1.0）」を受審し、認定を取得することができました。3月には機構本部からハイブリッド手術室の導入（令和3年度中完成）が承認されました。そして当院はNewsweek誌が公表するWorld's Best Hospital 2020に選ばれ、3月19日に認定証が届きました。一方、令和元年度の経営は非常に厳しく、医業収支は3億5千万円の赤字、経常収支は1億9千万円の赤字でした。

令和2年は年明けから、新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行が始まりました。それに伴い、日本でも感染が全国的に拡大し、本院もコロナ患者さんの受け入れ、職員の感染防止対策に全精力を注ぐことになりました。しかし、コロナ時代でも本院の目標が「地域のニーズに応えて高度・急性期の医療を推進し、地域の皆さまから信頼され、診療の質をさらに向上させていく」ことに変わりはありません。

当センターが地域の基幹病院として十分な役割を果たしていくためには、職員一同のたゆまざる努力に加えて、病院を支えてくださる方々のご支援が不可欠です。今後も益々のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

院長 小池 薫